

# はじめに

大正9年、東京帝国大学理学部植物学教室の中井猛之進博士のマリアナ諸島植物調査団が、帰路に北硫黄島に寄った際、島民から3本の磨製石斧が届けられました。マリアナ諸島にのみ分布するカヌーを造るときの石斧の形式だと言われています。

昭和58年、父島西町の民家を解体したとき、トウモロコシ等の穀物粉碎具としてタタキイシに転用されていた円筒形の磨製石斧が発見されました。これも同様の磨製石斧でした。

昭和47年には小笠原諸島で初めての分布調査が実施され、父島大村の大根山で打製石斧、削器等(大根山遺跡)が、母島沖村元地からは貝製品、骨角器等(沖村遺跡)が発見されています。

平成3年、東京都教育委員会による調査では、北硫黄島(石野遺跡)で巨石に描かれた線刻画、積石遺構、土器、打製石斧、シャコガイ製斧形製品等が発見されましたが、問題の円筒形丸のみ形磨製石斧は発見されませんでした。

石野遺跡の土器の分析結果はマリアナルートを示唆するもので、小笠原の先史文化が、マリアナ諸島からカヌーによってもたらされた可能性が改めて示されました。しかし同遺跡の石器類は、本州・伊豆諸島の縄文文化や南西諸島の先史文化に類似したものであり、南西諸島では積石遺構の類例も知られています。八丈島・本州方面から、及び沖縄方面からのルートも考えていく必要があります。

太平洋に浮かぶ小笠原諸島は、諸文化の接点に位置すると共に、近世以降においても広く太平洋に展開する人類活動の波を受けながら、今日の歴史が築かれて参りました。

今回、小笠原諸島の遺跡を訪ね、現在の姿と対比することといたしました。

調査、執筆は昭和47年に父島・母島の調査を初めて実施された東京都教育委員会小田静夫学芸員をお願いいたしました。

この冊子が、広く研究、教育、観光等に活用して頂ければ幸いに思います。

今後、更なる太平洋諸国との交流が深められていきますように願っております。

平成14年3月

東京都小笠原村教育委員会

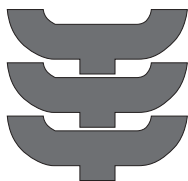
This booklet is intended to introduce Ogasawara archaeology and history. There are some archaeological objects and sites known on Ogasawara islands; the most of them is the Ishino site on the east coast of Kita-Iwo-jima, found in 1991. Those are supposed to relate to Jomon heritage, Kaidzuka culture of Ryukyu islands, and the prehistoric culture of Mariana islands. The exact origin of them is still at issue. The modern colonization of Ogasawara islands, began in the 19th century, showed another ocean wide communication and interaction, performed by the ancestors and the pioneers over the islands.

## 発掘された小笠原の歴史：目次

<b>1. 遺跡と埋蔵文化財</b> .....	3
遺跡と埋蔵文化財 .....	3
先史時代の小笠原諸島 .....	3
<b>2. 小笠原村の位置とその特性</b> .....	4
地理的環境 .....	4
自然環境 .....	5
<b>3. 小笠原の発見と定住</b> .....	6
小笠原の発見 .....	6
最初の定住民はハワイから .....	7
<b>4. 小笠原回収と近代化</b> .....	8
ペリー提督の来航 .....	8
幕府による小笠原回収 .....	9
小笠原の近代化 .....	9
<b>5. 考古学調査前史</b> .....	10
マリアナ地域の調査 .....	10
3点の磨製石斧 .....	10
<b>6. 東京都による遺跡分布調査</b> .....	12
昭和47年度の遺跡分布調査 .....	12
平成元年度からの遺跡分布調査 .....	13
<b>7. 父島の考古資料</b> .....	14
大根山の先史遺跡 .....	14
父島大村周辺の先史遺跡 .....	15
<b>8. 母島の考古資料</b> .....	16
沖村の先史遺跡 .....	16
<b>9. 北硫黄島の石野遺跡</b> .....	18
旧石野村の先史遺跡 .....	18
石野遺跡の遺構 .....	19
石野遺跡の遺物 .....	22
石野遺跡の位置付け .....	24
<b>10. マリアナと「太平洋の道」</b> .....	26
丸ノミ形石斧と円筒石斧 .....	26
マリアナ諸島の先史遺跡 .....	26
マリアナ先史文化の区分 .....	27
円筒石斧文化 .....	28
もう一つの日本文化 .....	29
<b>11. 小笠原の考古資料群</b> .....	30

# 1. 遺跡と埋蔵文化財

## 遺跡と埋蔵文化財



遺跡とは何でしょうか。厳密にいうと、昨日以前は考古学の対象となりえます。先史時代は言うに及ばず、歴史時代、また近代の戦跡、昭和時代も考古学の対象です。

埋蔵文化財とは何でしょうか。これは文化財保護の観点で、土に埋もれていた等の特殊な状況で発見される歴史資料を指す言葉です。

小笠原諸島の歴史は、近代的な定住が始まってから未だ2世紀も経っていませんが、その間の出来事ですら、多くの物質的な痕跡に記録されているはずで、これは、文献や記憶とは異なる観点から、貴重な歴史資料となりうるものです。

埋蔵文化財保護で重視されるのは、そうした未だ知られざる故に、あるいは十分に意識的な管理下になく、潜在的な滅失の危機にさらされた「埋もれた歴史資料」への関心を保ち、貴重な資料や情報の保全と整備を図ることです。歴史を考える立場は多様かもしれませんが、考えるための資料は守っていくべきでしょう。



小笠原新治碑

## 先史時代の小笠原諸島

さて先史時代の小笠原諸島は？ 歴史時代に「無人島」といわれた大平洋の孤島、小笠原にも遺跡が3カ所登録されています。父島、母島、北硫黄島にそれぞれ1カ所ずつです。北硫黄島の石野遺跡は大規模な遺構と共に発見されています。これらの遺跡の由来は、まさに今後の研究課題ですが、伊豆諸島を含めた日本本土、沖縄、マリアナなどと、それぞれ関係が考えられています。どこに視点を置くかは、研究者によって異なります。

小笠原地域での現在の居住は父島と母島に限られていますが、硫黄島と南鳥島も有人の島です。戦前は北硫黄島も有人島でしたし、父島や母島の属島を含め、先史時代における定住の可能性はまだ広がっています。これまで、父島や母島で確かな生活を示す包含層は見つかっていませんが、人工の遺物(石器・骨角器・貝製品)は収集されています。これからも小笠原では新たな遺跡発見の可能性が大いに期待されます。

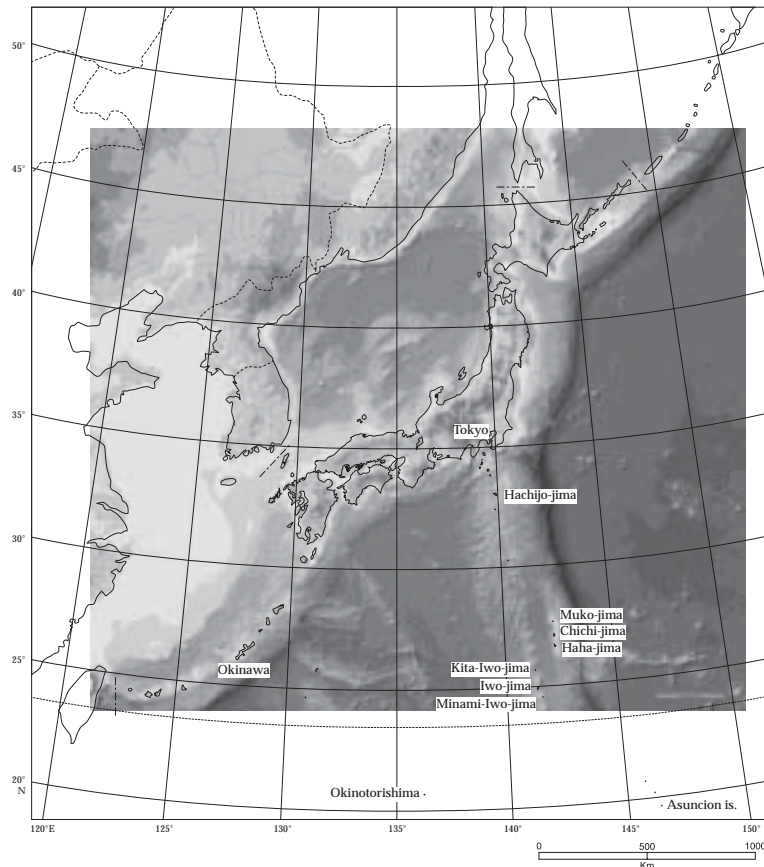
## 2. 小笠原村の位置とその特性

### 地理的環境

小笠原村は東京から南へ約1,000km以遠の太平洋上に浮かぶ30余りの島々からなっています(岩礁を含めると約150)。小笠原諸島は主に四つの列島群と属島からなり、北から聳島列島、父島列島、母島列島が並び、やや離れて南南西に硫黄列島(火山列島)が位置しています。また父島西方に西之島、さらに遠く離れた本邦最東端の南鳥島(マーカス島)、最南端の沖ノ鳥島が点在しています。面積の多い順に、父島23.8km<sup>2</sup>、硫黄島23.2km<sup>2</sup>、母島20.2km<sup>2</sup>、兄島7.9km<sup>2</sup>、北硫黄島5.6km<sup>2</sup>、弟島5.2km<sup>2</sup>となっています。東京都庁との直線距離は、父島984km、母島1032km、硫黄島1218kmです。

小笠原の列島群は、大太平洋プレートがフィリピン海プレートの下に沈み込む地帯に生じた小笠原海嶺上に位置しています。これを一般に島弧といいます。聳島・父島・母島列島は生成の古い前弧、西之島と硫黄列島は新しい火山弧に属し、鳥島(豆南諸島)や伊豆諸島と同様、現在も活発な火山活動を続けています。前弧の列島群が海上に姿を現わしたのは数百万年前のことと考えられます。

島弧





父島大根山

# 大洋島

## 自然環境

気候は海洋性の亜熱帯に属しますが、海流の影響で熱帯的気候を示しています。地理的には、伊豆小笠原島弧の南端、マリアナ島弧の北方に位置し、フィリピン海をめぐる日本列島、伊豆諸島、琉球列島、台湾、フィリピン、マリアナ諸島との関連が考えられ、広くオセアニアとの繋がりも視野に入れるべき地点です。

小笠原は大陸と地続きになったことのない大洋島であるため、固有種・固有亜種の多いことで知られています。「東洋のガラパゴス」「進化の島」などと呼ばれるゆえんです。

植物相は北方種の南限、南方種の北限に当たり、伊豆諸島とは全く異なり、熱帯・亜熱帯種が80%を占めています。植物の25%が固有種で、中でも木本類は70%にも達しています。しかし、琉球列島に自生するマングローブ植物や海岸性のヤシは自然植生としては存在していません。

動物相は貧弱ですが、固有種の多い島です。唯一の陸産哺乳類ではオガサワラオオコウモリがいます。昆虫ではオガサワラトンボなど5種、鳥類では特別天然記念物のメグロ（ハハジマメグロ）、アカガシラカラスバト、オガサワラノスリが天然記念物です。海産生物としては、黒潮幹流と赤道海流の中間地で、海水の温度を高めている為に50種類以上の造礁サンゴ類が発達しています。貝類、魚類、甲殻類、哺乳類、爬虫類などは本州・四国・九州地域には認められない熱帯系の動物相であり、ザトウクジラ、アオウミガメの日本最大の繁殖地としても知られています。

## 3. 小笠原の発見と定住

### 小笠原の発見

小笠原は古文献を見る限り先住民のいない無人島でした。小笠原の発見は大航海時代、ヨーロッパ人による火山列島に関する目撃記録が最初になります。1543年スペインのルイ・ロベツツ・ヴィラボスが三つの島を発見して、ロス・ボルカネスと命名し、これが火山列島とされています。1639年オランダのタスマンも日本列島近海で無人島を発見し、この島も小笠原と考えられています。1643年にはオランダのド・フリーズが小笠原に接近して、エンゲルス・トロフテ島(沖ノ島島)、ホーヘ・メーベン島(北硫黄島)、エンゲル島(母島)、フラハト島(父島)と海図に記録しました。

小笠原が日本人に知られるようになったのは、1670年(寛文10)紀州(和歌山)藤代の荷主長右衛門ら7人が、江戸へミカンを運ぶ途中暴風雨に遭って小笠原(現在の母島)に漂着し、数ヶ月後に父島、八丈島を経て無事帰還した事件がありました。八丈島のはるか南方に豊かな無人島発見のニュースは、当時かなりの評判になったようです。幕府は調査のため、たまたま長崎で建造されていた外洋航海船を1675年(延宝3)に小笠原巡検に派遣します。船頭嶋谷市左衛門ら一行38人の探検隊は、緯度を計測して詳細な地図を作成し、また現在の宮之浜に祠を建立し、祠の脇には「此島大日本之内也」云々と記したとされています。幕府による延宝の巡検は、近代において小笠原が日本領として認められた根源となりました。

漂着と巡検によって確認された南方の無人島の情報は、1690年に長崎オランダ商館に赴任したドイツ人医師ケンペルによってヨーロッパに伝えられました(1727年初版の『日本誌』に掲載)。日本では1785年(天明5)の林子平『三国通覧図説』が情報を詳しくまとめた最初の刊本になります。同書は1817年にフランス人レミューザが発表した論文で引用され、無人島はその読みから「ボニンアイランズ」と紹介され、Boninが欧米系の小笠原地名として定着するに至ります。

小笠原の地名は、1727年(享保12)小笠原宮内貞任なる浪人が奉行所に提出した『巽無人島記』と題する作者不詳の写本が大元になっています。貞任の主張では、父島は26里×90里、母島は10里×27里あると言っていますが、実際には最大でも2里強(父島)、3里強(母島)しかあり

ません。つまり架空の話なのですが、具体的で親族に因んだユニークな地名は「無人島」のイメージを膨らませ、貞任の先祖が1593年(!)に小笠原島を発見したという話は小笠原発見伝承として定着するに至りません。幕末になって、幕府が小笠原回収に向った時にも、「故事」として引き合いに出されています(小笠原新治碑)。

## 最初の定住民はハワイから

1820年代になると、欧米人の捕鯨活動の遠洋化が北大平洋にも及び、小笠原への本格的な来航が始まります。1823年英国の捕鯨船が母島に到着し、コッフィン群島と命名します。1825年、26年にもイギリス捕鯨船が父島に到着しています。1827年にはイギリス海軍の調査船ブロッサム号(艦長ピーチー)が小笠原を探検し、父島をピール島、母島列島をベイリー群島、二見港をボート・ロイドと命名します。翌1828年にはロシア軍艦も父島へ来航しています。

ホノルルの英国領事は、捕鯨船の寄港地として重要になったボニン・アイランズの開拓を計画し、マテオ・マザロ(イギリス人、団長)、ジョン・ミリオンチャンプ(イギリス人)、ナサニエル・セヴォレー(アメリカ人)、オーデン・チャピン(アメリカ人)、チャールズ・ジョンソン(デンマーク人)の計5人と、彼らに率いられたハワイ人20人からなる入植団が結成されました。

一行は1830年ホノルルから一艘のスクーター帆船で、家畜数頭を携えてピール島(父島)に到着しました。入植者たちは初めチーフピリッジ(洲崎)に集落を形成していましたが、やがて奥村や大村、扇浦などの海岸部に分散していきました。寄港した捕鯨船からの残留者や、島を去った住民もいましたが、常時40人程度の人口が維持されていたようです。後にイギリス勢は島を去り、セヴォレーが島の首長格となりました。

彼らはタマネギやサツマイモなどの農業を営み、シャツなどの雑貨を捕鯨船などから購入していました。ハワイ系の人びとは、タロ芋を主食にしている、今日小笠原に見られるタロ芋類は、この時のハワイ原産種と言われています。また、漁業にも携わり、季節的に海を埋め尽くすほど産卵のため訪れる海亀を捕獲して、年に何度か入港する捕鯨船に販売しました。

## 4. 小笠原回収と近代化

### ペリー提督の来航

こうして日本開国の20年程前から、幕府が知らないところで、ポニン・アイランズは欧米人主導のささやかな入植地としてスタートし、二見湾という天然の良港を擁した捕鯨船の寄港地として、地理的に重要な地点となっていました。1837年、イギリス政府は対清政策の軍事的後方基地としての島の役割に注目し、軍艦を派遣して入植地を調査しますが、後に香港を手に入れて急速に関心を失います。1840年(天保2)には165年ぶりに陸奥国気仙郡の中吉丸の漂着事件が発生しています。

1853年(嘉永6)日本開国を求めるアメリカ政府派遣のペリー艦隊が、琉球那覇に続いて小笠原を訪れます。島の首長格となっていたセボリーに面会したペリーは、島に自治政府を作るよう勧め、また清瀬付近に貯



カナカ族の生活(『ペルリ提督日本遠征記』岩波文庫版)

1853年父島八瀬川

サンドウィッチ諸島人、すなわち今日の航海家達や商人達に親しまれている名によるとカナカ人は、生れ故郷の島におけると甚だ似た生活をしており、又椰子の葉で葺いた小屋が群をなしていて、大体彼等の生れ故郷の村々のような様子をしている。住民達は快適で心地よい気候のうちに、又極くわずかの労苦に報ゆるに飲食したいと思う全てのものを供給してくれる豊饒な土地に、静かな安易な生活をしているのであって、この境遇を変化させようとは望まないのである。アメリカ人やヨーロッパ人は、性質がよくて信頼できるカナカの女を妻にしている。



炭所用地を購入しています。アメリカの動きを知ったロシアも同年、艦隊を小笠原に派遣しています。後にペリー日本遠征の報告書入手した幕府は、はじめて小笠原の地政学的重要性を知るところとなりました。



1862年母島沖村（『小笠原島真景図』）

## 幕府による小笠原回収

# 咸臨丸

幕府は1861年（文久元）小笠原の回収を正式に決定し、周到な準備のもと、外国奉行水野筑後守忠徳を長とする、役人や医者からなる一行を、軍艦咸臨丸で小笠原に送ります。品川出航は文久元年12月4日、太陽暦で1862年1月3日の事でした。途中浦賀、八丈島に寄港し、父島二見湾には文久元年12月19日に入港しています。直ちに移住欧米人との話し合いが持たれ、島民の土地などの既得権を保護し、後に日本人移民団を派遣して小笠原を幕府直轄の経営地とする事などを伝えました。これまで公権力の保護を受けていなかった入植地にとって、日本による領有の明確化は歓迎するところでもあったのです。翌年、八丈島民を中心に38名の移民が送られましたが、直後に英国との関係が一時的に緊張したため、日本人は全員引き揚げ、小笠原はまた欧米人やハワイ人だけの島に戻ってしまいました。

## 小笠原の近代化

1875年（明治8）明治新政府は小笠原の再回収と開拓を決定し、明治丸を派遣します。回収委員の一行は島民の代表者達に統治の再開を告げ、島民も日本政府の保護を受け、法令に従う事を誓います。翌年、小笠原を内務省の所管とし、30数名の日本人入植者を送り、いよいよ本格的な小笠原の開拓が始まりました。1880年（明治13）には東京符に移管され、父島 - 横浜間の定期船も年4便になっています。昭和15年には父島4302名、母島1905名の人口を数えるまでに発展しています。

## 5. 考古学調査前史

### マリアナ地域の調査

小笠原の考古学調査史は、1920年（大正9）の東京大学・中井猛之進と、1927年（昭和2）の長谷部言人によるマリアナ地域の調査に始まります。

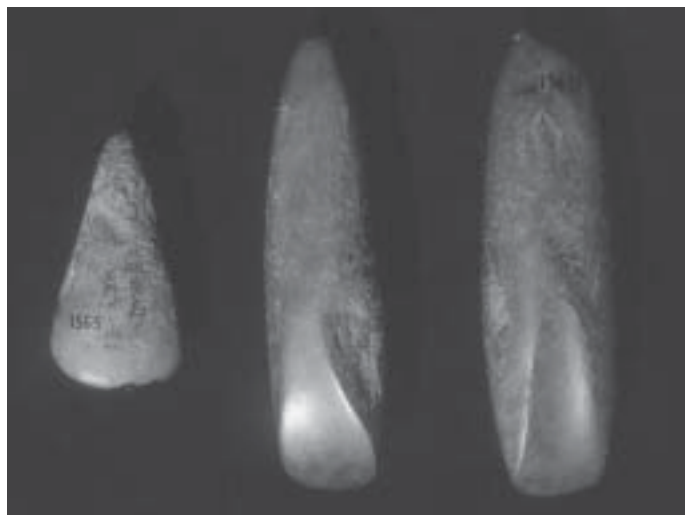
中井は植物調査の帰路、北硫黄島で3本の磨製石斧の寄贈を受けます。長谷部はマリアナの考古学調査を行い、同行した八幡一郎が後に小笠原に立ち寄り漁撈具の調査を行いました。八幡は1938年に縄文時代の乳棒状石斧を紹介する中で、日本周辺におけるこの種の石器の分布として、少し型式が異なるがマリアナ諸島と北硫黄島にも発見されていると述べています。

1942年には甲野勇が、東京大学人類学教室に所蔵され、かつて八幡が乳棒状石斧類似品として指摘した北硫黄島の磨製石斧1点を紹介しました。甲野は、この石斧は「丸ノミ形石斧」で、類似品は大洋州諸島に認められ、マリアナ諸島にのみ分布する石斧の型式であると述べました。

### 3点の磨製石斧

現在、東京大学総合研究博物館には、北硫黄島発見と伝えられる3本の磨製石斧が所蔵されています。この資料は1920年に東大植物学教室の中井猛之進が、マリアナの植物調査の帰路に、北硫黄島の警察官から献上された石器でした。

石野平之丞は母島の人で、1896年新しい漁場を探す目的で火山列島を探索して、北硫黄島の開拓を決意しました。1899年に入植し、まもなく40戸の人口になり、1902年には自費で仮学校を開校するまでになりました。



1904年には人口156人、仮学校も石野村尋常小学校となりました。こうした明治期の北硫黄島の開拓史を調べると、石斧の出土地がこの石野村集落地周辺である可能性が大きいのです。

3点の磨製石斧は以下のようなものでした。

1. 片刃石斧	長さ 14.0cm	幅 5.0cm	重さ 121g	玄武岩製
2. 丸ノミ形石斧	長さ 18.2cm	幅 5.0cm	重さ 635g	玄武岩製
3. 丸ノミ形石斧	長さ 19.2cm	幅 5.3cm	重さ 625g	玄武岩製

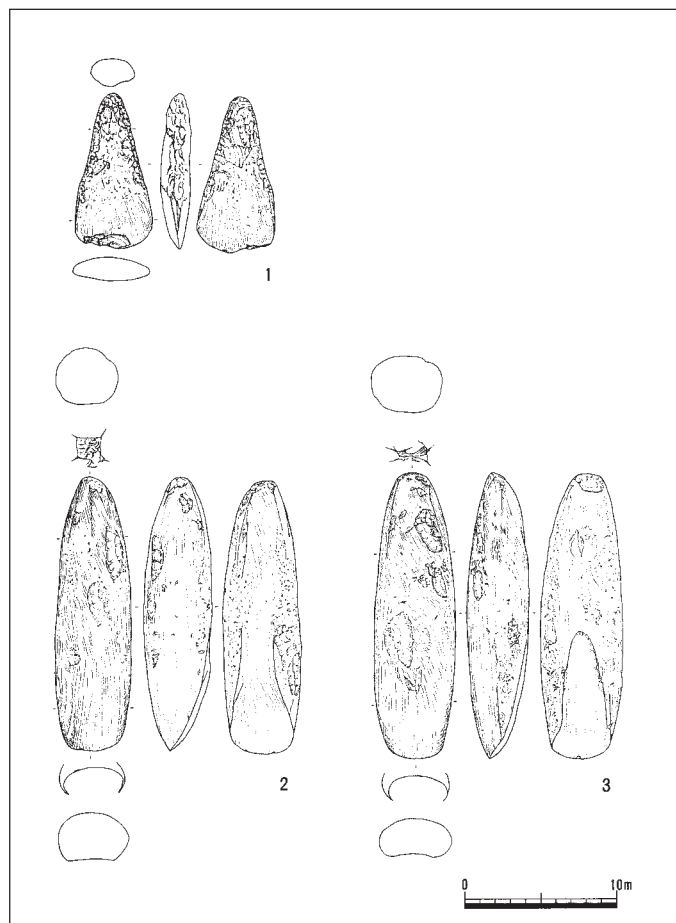
この石斧の由来を当時の関係者に聞き取り調査した結果、次のようなエピソードが復元できました。

1920年東京帝国大学植物学教室の中井博士は、学生を引率してマリアナ諸島の植物調査を行いました。調査団は帰路、北硫黄島に上陸して島内の植物調査を行う予定でありましたが、海が荒れて接岸出来ずに沖合

に停泊する羽目になってしまいました。その時、島から、荒れる海をはしけ船で一人の警察官がやってきたのです。彼は船上で中井に面会し、一包みの重い荷物を手渡して帰って行きました。その包みの中には新聞紙にくるまった3本の磨製石斧が入っており、中井はそれを大学に持帰り植物学教室に保管していました。

その後資料は人類学教室に移され、現在、東京大学総合研究博物館に収蔵されているというものです。

おそらく、村長の石野平之丞が、東大の学者先生が来島するので、村内で発見した大切な磨製石斧を鑑定してもらつつもりで用意していたものと考えられます。



## 6. 東京都による遺跡分布調査

### 昭和47年度の遺跡分布調査

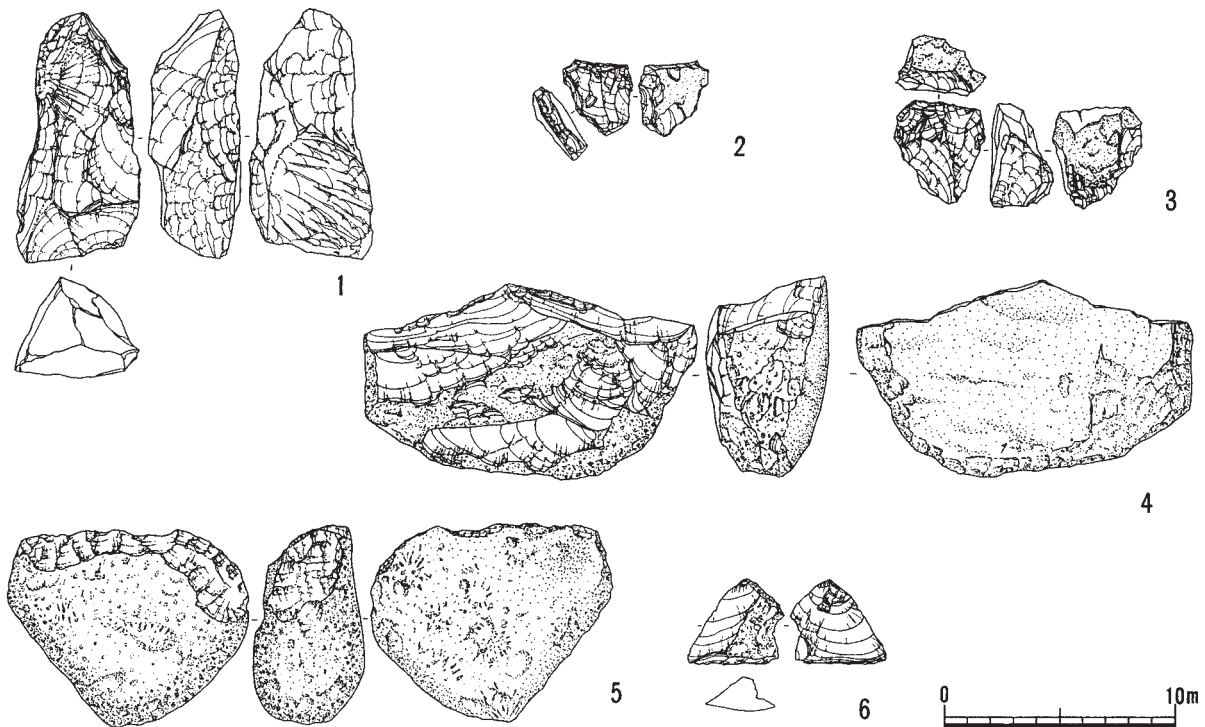
小笠原諸島は太平洋戦争終了後、22年10カ月の長きにわたりアメリカ軍施政下に置かれ、1968年6月26日に日本に返還されました。返還後直ちに行われた学術調査は自然科学部門で、人文科学部門は遅れて出発しました。東京都文化課は昭和47年(1972年)から3カ年「遺跡分布調査」を、昭和52年(1977年)から5カ年「小笠原諸島文化財調査」を行いました。

昭和47年の予備調査では、父島の大根山から打製の石斧、礫器とメノウ製の剥片類を発見しました。これらは学術調査で発見した、小笠原で最初の考古学的資料と言えます。

昭和47年の遺跡分布調査は、國學院大学の永峯光一を団長にして、初めて小笠原に考古学調査団が渡島した記念すべきものでした。しかし期待された北硫黄島への上陸は、台風の季節と重なり、また無人島でもあることから実施されませんでした。

さらに昭和47年の調査では、母島の沖村でタカラガイ製の貝製品(ペンダントか貝錘)、骨角製の擬餌針(ルアー)等が発見されました。

大根山発見の石器・剥片類



1. 打製石斧、2. スクレイパー、3. 石核、4・5. 礫器、6. 剥片

## 平成元年度からの遺跡分布調査

平成元年（1989年）から3カ年、小笠原を対象にした本格的な遺跡分布調査が、東京都文化課によって行われました。団長は國學院大學の永峯光一で、この調査には沖縄県、ニュージーランド、国内のオセアニア考古学研究者、人類学研究者が参加した国際的なプロジェクトチームでした。

### 初年度

初年度（1989.9.3～9.14、1990.2.14～2.19）は父島と母島で試掘による遺跡の探索を行いました。父島八瀬川河口の砂丘では、ウミガメの骨や近世の陶磁器等が確認されています。母島では沖村、評議平で表面採集を行い、近世の陶磁器、石皿、磨石等を発見しました。

### 2年度

2年度（1990.7.1～7.12、9.3～9.14）は初めて北硫黄島に上陸し、旧石野村、旧西村の集落跡周辺の分布調査を行って、旧島民の遺構や生活用具を多数確認しました。母島では旧北村の集落跡の状況調査と、属島の姉島、平島でも試掘調査を行いました。しかし、いずれの地点でも、先史時代に遡る考古学的資料は確認されませんでした。

### 3年度

3年度（1991.7.1～7.12）は北硫黄島だけに上陸し、旧石野村周辺を中心に遺跡の探索を行いました。その結果、海と村を見下ろす高台部に、巨石を囲んで遺構らしき石積みと配石群が確認されました。そして、その

周辺には土器と石器が多数散布していたのです。ここに、確かな先史時代の遺跡が、小笠原で初めて確認されました。

調査団はこの結果を都文化課に報告して、更に2年間の石野遺跡の継続調査を決定しました。1993年石野遺跡の発掘調査が行われています。



八瀬川河口での調査

## 7. 父島の考古資料

### 大根山の先史遺跡

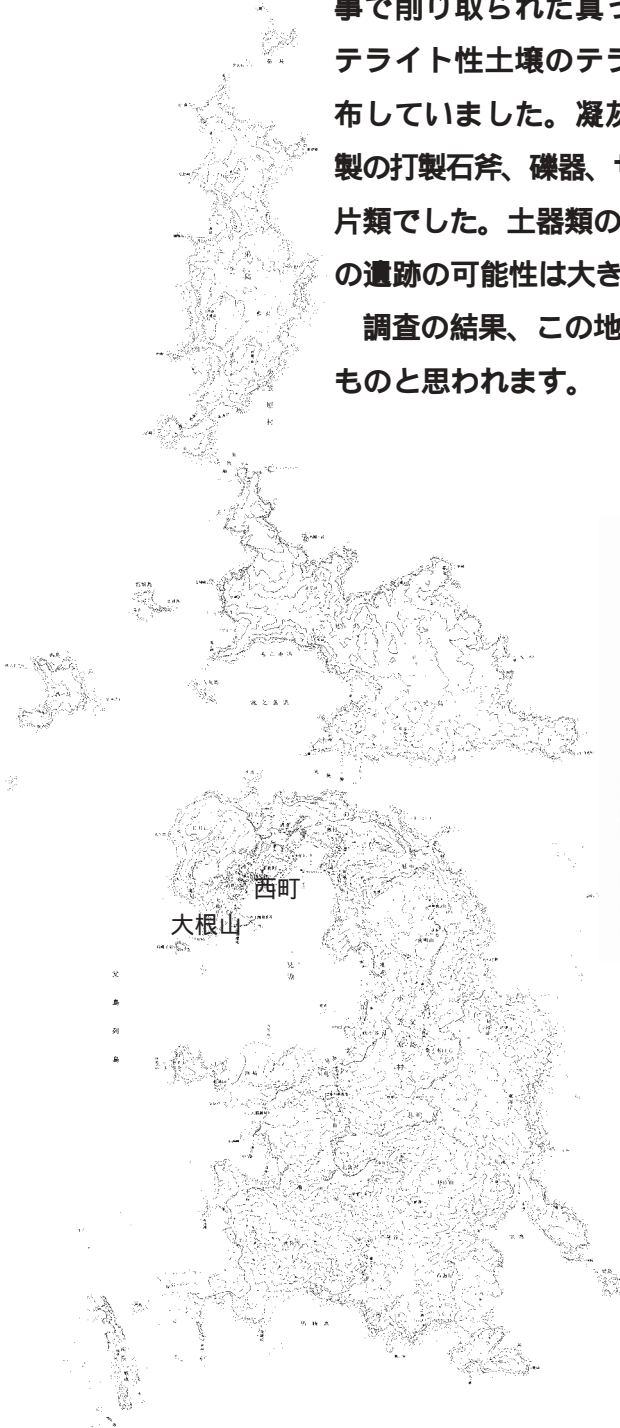
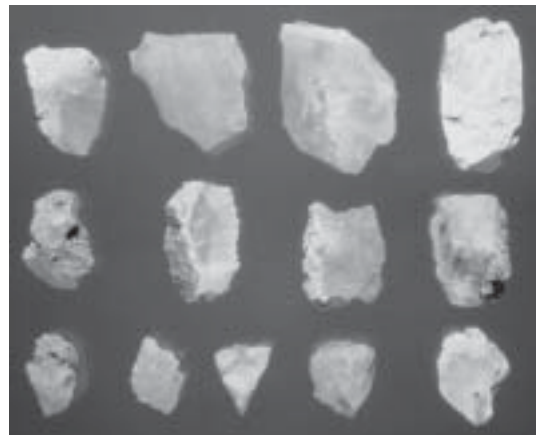
父島の二見湾に突き出した大根山の先端部に、海上自衛隊の電信用のアンテナが建っています。遺物はこの整地工事で削り取られた真っ赤なラテライト性土壌のテラスに散布していました。凝灰質砂岩



製の打製石斧、礫器、サンゴ製礫器と多数のメノー製のスクレーパー、剥片類でした。土器類の発見がなく、時代判定は不明ですが、石器時代人の遺跡の可能性は大きいと言えます。

調査の結果、この地点の遺物包含層は既に削平され消失してしまったものと思われます。

### 大根山発見の石器・剥片類



## 父島大村周辺の先史遺跡

1983年西町で一軒の民家が解体されました。その折、この家に古くから所有され、穀物調理に使用されていた石皿とタタキイシが発見され村に寄贈されたのです。驚くことにこのタタキイシは、「磨製石斧」を利用した二次的使用の道具でありました。石斧の頭部をスリコギ棒の先端として、石皿の上でトウモロコシの粉碎に杵のように使っていた物でした。

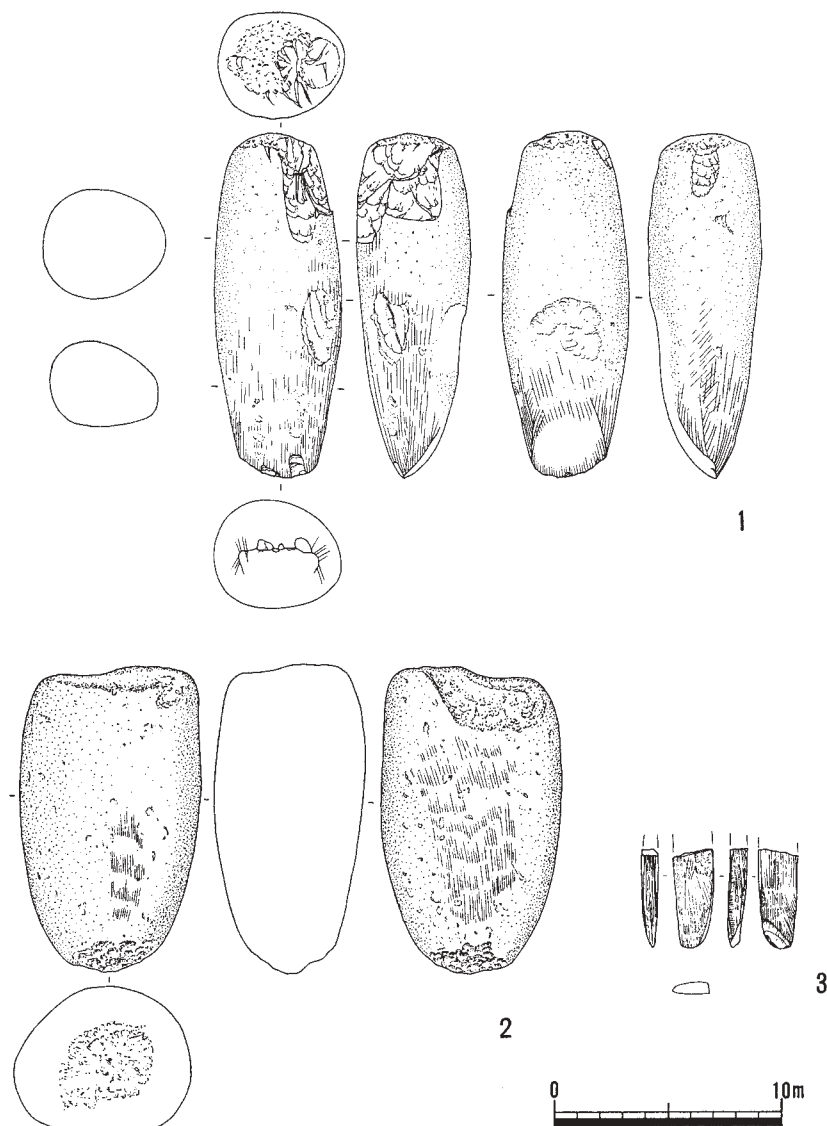
小笠原では戦前までこうした石製の調理具を、山麓や浜辺の自然石や

礫の中から選んで使用していました。しかし、この石斧の由来については、大村周辺で拾ったものではないかという情報しか得られませんでした。

資料は丸ノミ形石斧で、長さ14.7cm、幅5.6cm、玄武岩製。身は円筒形、刃部は丸ノミ状に凹んでいます。一見して北硫黄島の丸ノミ形石斧の仲間であることが分かります。

この石斧が父島で出土したものであれば重要な資料となります。つまり父島は、北の八丈島と南の北硫黄島、さらに南のマリアナ諸島とを結びつける中間的な位置にある島なのです。

### 父島発見の石器



1 西町伝世の磨製石斧、2 大村公園採集の敲石、3 八瀬川河口砂丘発掘の磨製石斧

## 8. 母島の考古資料

### 沖村の先史遺跡

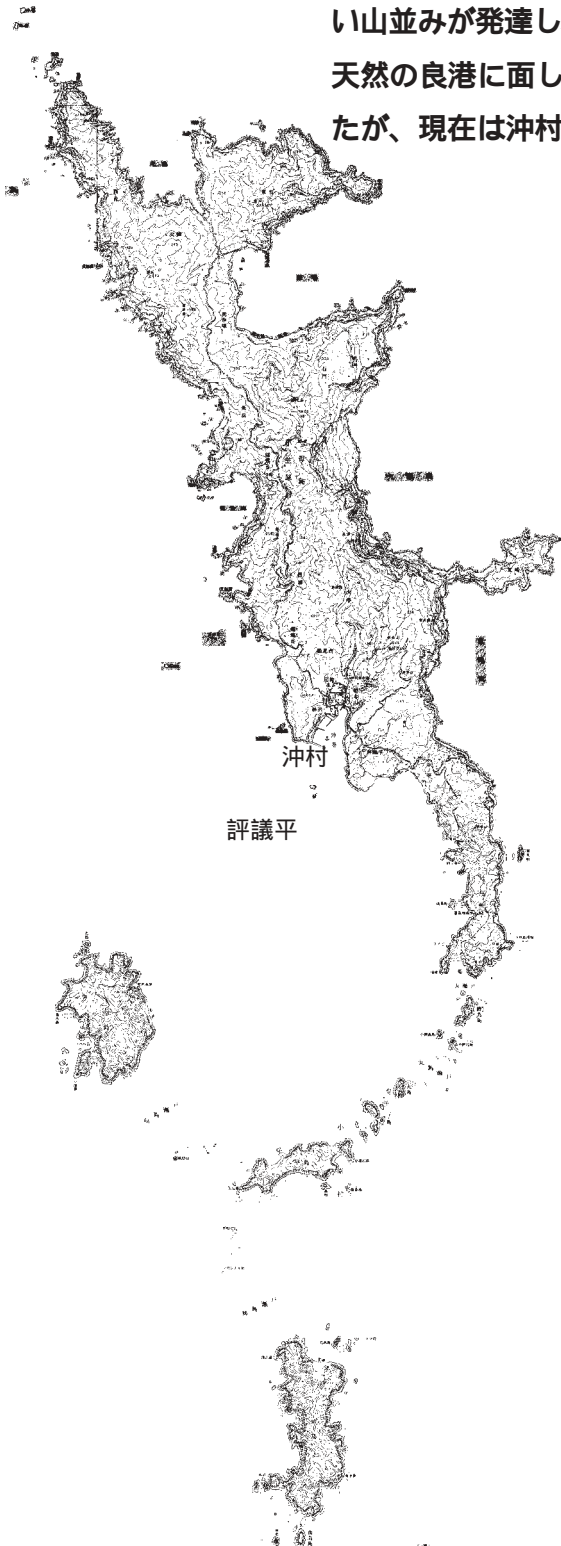
母島は父島より地味豊かで地形も緩やかであり、南半分は評議平と呼ばれる低い丘陵が続き、農業地として利用されています。北半分は高い山並みが発達し、鍾乳洞、洞穴なども多く存在しています。母島には天然の良港に面して、北村（北港）と沖村（沖港）の2村が存在しましたが、現在は沖村に島民が集中して生活しています。

沖村は母島で最も広い後背地をもつ場所で、小河川が流れ、河口部には砂丘が形成され、最初の入植地でもありました。こうした立地条件から先史時代人も上陸した可能性が高い地点なのです。

1972年の東京都による遺跡分布調査で、都営住宅の建設現場から骨角貝製品が初めて発見されました。擬餌針はウシなどの搬入家畜の角を加工したものであり、糸括りの孔に鉄サビが付着していました。有孔のタカラ貝製品は釣針ないし漁網の錘（オモリ）の可能性がります。

1984・85年の国際基督教大学考古学研究室の分布調査では、評議平で素焼きの大形陶器片が採集されました。灰褐色の甕・鉢類で、顕著な輪積痕、指頭痕、無文などの特徴があります。

1989・90年の小笠原分布調査では、母島全域の遺物分布と河口の洞穴の試掘が行われました。その結果、タカラガイ製貝製品と石皿、磨石、それに多数の近世・近代期の陶磁器類が発見されています。

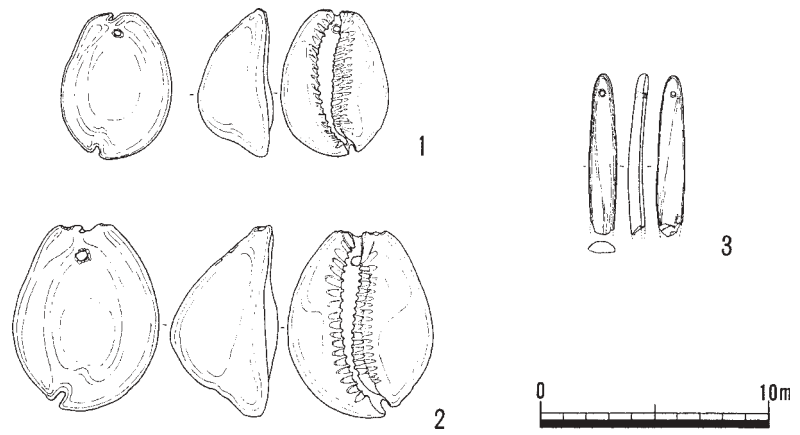




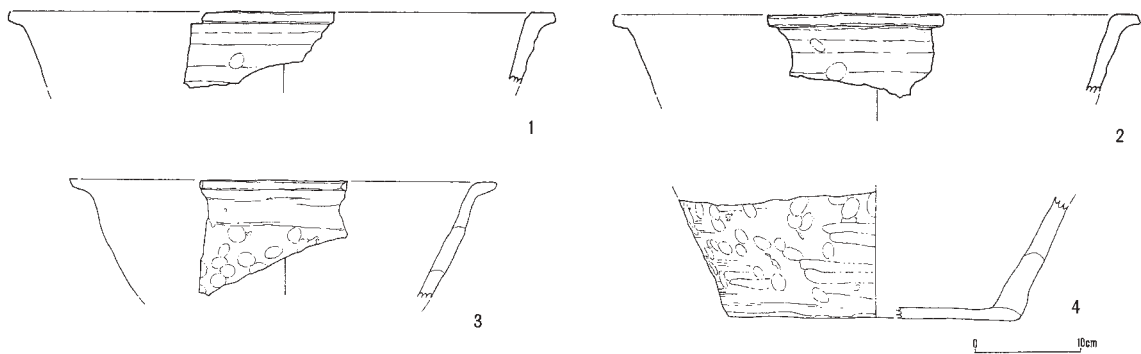
今の沖村



沖村遺跡の骨角貝器



評議平発見の陶器



## 9. 北硫黄島の石野遺跡



### 旧石野村の先史遺跡

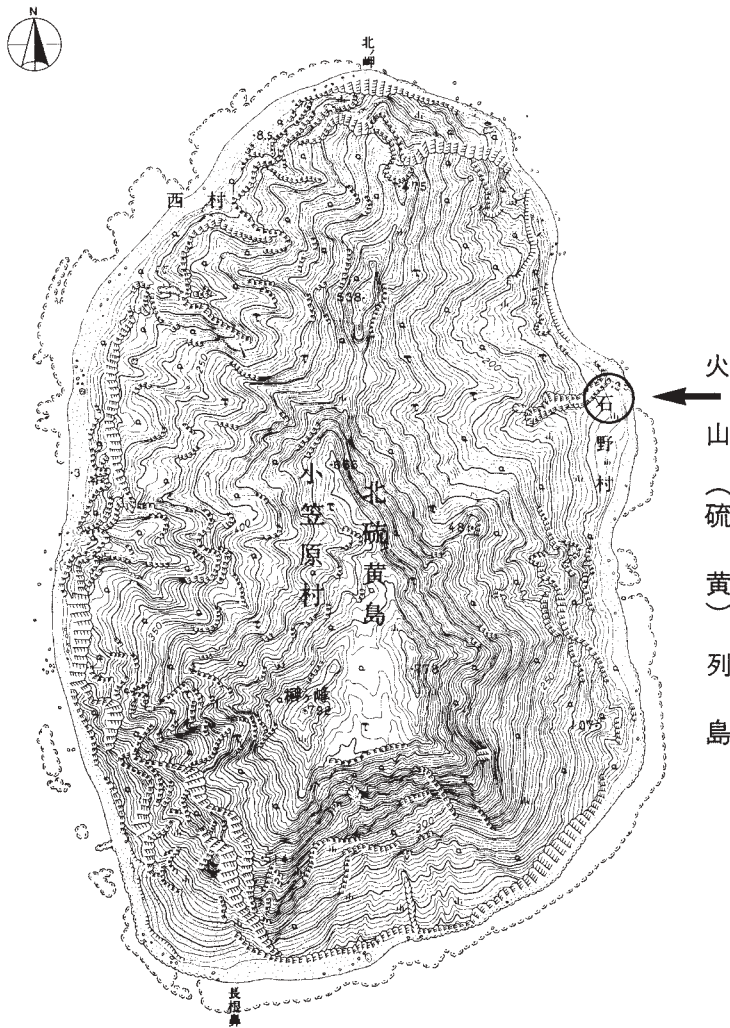
1989年から行われた小笠原諸島他遺跡分布調査で、火山列島最北端の北硫黄島から、確かな先史時代の遺跡が発見されました。

北硫黄島は南北3.3km、東西2.0kmの楕円形を呈し、最高峰の櫛ヶ

峰(804m)を頂点に円錐形をした島です。海岸部は大小の火山岩からなる礫浜で、その多くは断崖に囲まれ、砂浜や砂丘は形成されていません。島の沿岸にはサンゴ礁がところどころ発達し、リーフの形成も認められています。

戦前は石野村と西村の2村があり、東側のリーフの切れ目に面した石野村が中心でした。石野村には50~100mの標高をもつ段丘上の傾斜地が、海岸に平行して広く形成されており、遺跡は、この旧石野村の后背地の高台部に形成されていました。

遺構から採取されたシャコガイのC-14年代測定結果は約2000年前(1980±80yBP)でしたが、本遺跡の年代を特定する上では、まだ参考値であり、今後の研究を必要としています。



0 1000m



## 石野遺跡の遺構

### 遺跡の内容

石野遺跡は約50 × 20mの規模であり、その範囲内に土器、石器、貝製品、海ガメ、海鳥の骨などの遺物が多数散布していました。

海岸から登っていくと、まず線刻画の描かれた巨石が位置し、さらに進むと北東数mに積石遺構が分布し、その先の北東数10mのところに祭壇があります。祭壇の前面には広場が形成されています。こうした遺構の配置内容からして、石野遺跡は集落遺跡というより、墓域か祭祀遺跡としての性格が強いもののようです。





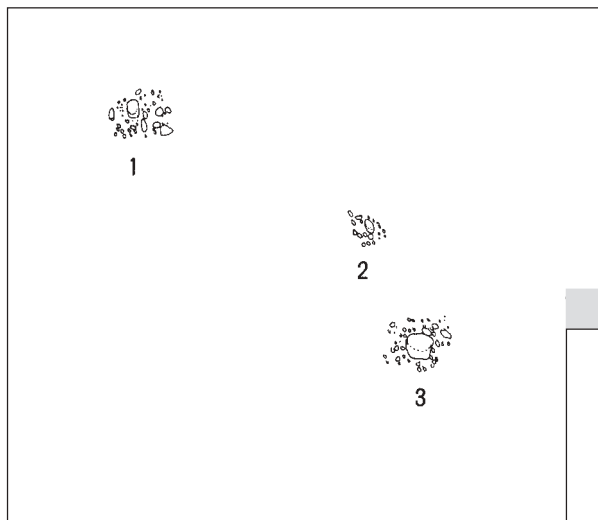
祭壇 1

遺跡高台部に多数露出する大小の玄武岩塊を、楕円形に二段に積み上げ、上段中央部には、鏡石としての巨石を配置しています。また、この祭壇の前面には 100m<sup>2</sup> 規模の広場が形成されていました。

積石遺構 2

大小の玄武岩円礫・角礫を積み上げたものです。その一つには平面形が長方形で、長軸の両端にサンゴとシャコガイを対に配置したものが数カ所認められています。

遺構群の見取図



巨石の線刻画



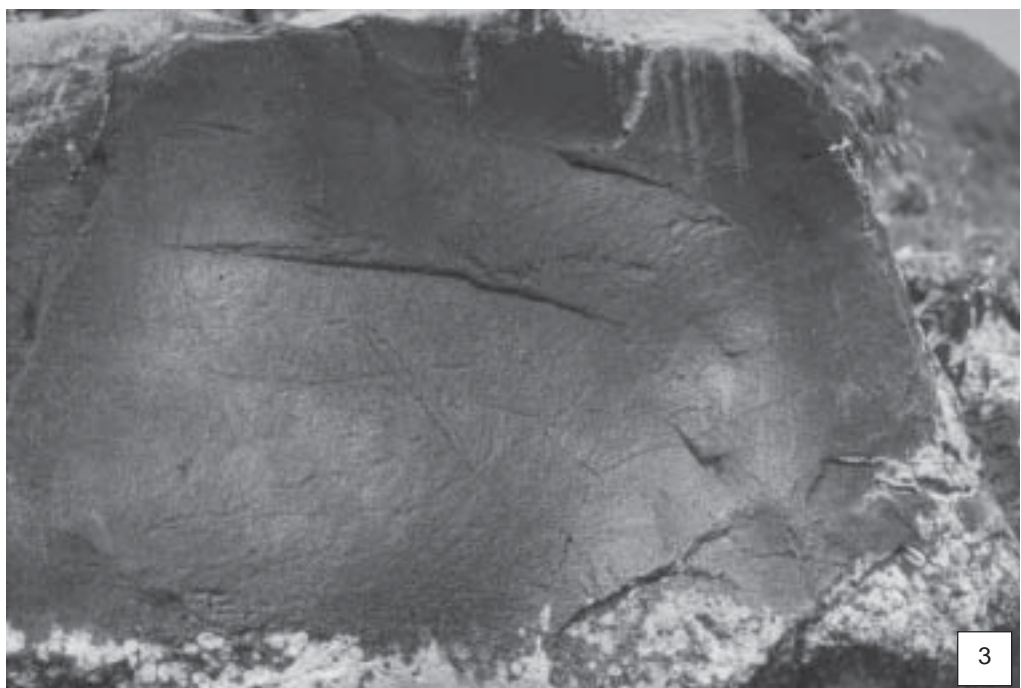


なお、この広場は戦前にサトウキビの集積場として使われたため、当時に礫や遺物が動かされ、再集積されていた可能性もありますが、古代において礫石からなる遺構が付近に構築されていた事実は動きません。

線刻画 3

巨石前面の平坦面に、ドットによる線刻画が発見されました。この巨石は海上の船からはっきりと視認でき、遺跡の中心地と考えられます。

絵は幅1センチ、深さ数ミリの線ですが、この線は細い工具の先端で連続刺突したペッキングという手法を用いています。絵の内容は五つのまとまりに分かれ、飛ぶ鳥、魚などという意見もあります。



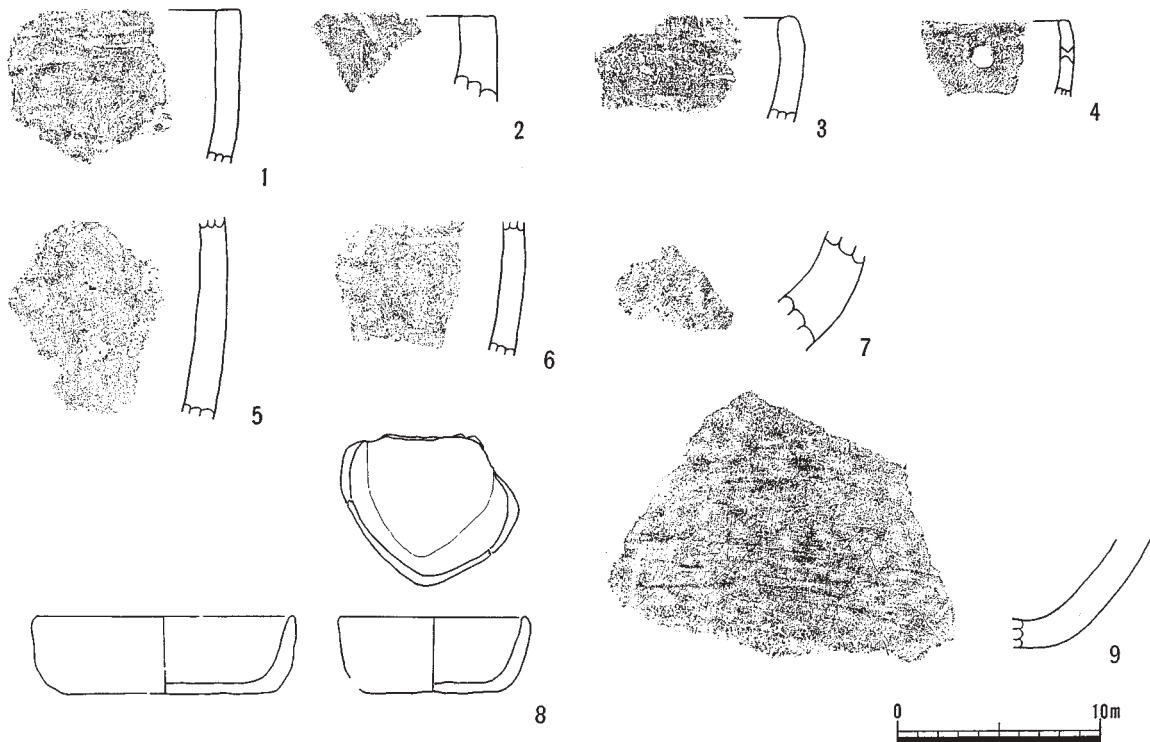
## 石野遺跡の遺物

遺跡の表面には多数の土器片が散布しており、全て無文の土器で、厚手と薄手の二種類が認められています。大多数は大型で厚手の土器類で、器形は小型品(4、8)は浅い皿形土器、大型品が深鉢形でした。発見された土器には文様がなく、器形からもその系統を確定するまでには至っていません。土器の胎土分析によれば、琉球列島や伊豆諸島の土器と類似せず、南のマリアナ諸島のグアム、サイパン島の土器と鉱物組成が共通し、この地域との関連が示唆されています。

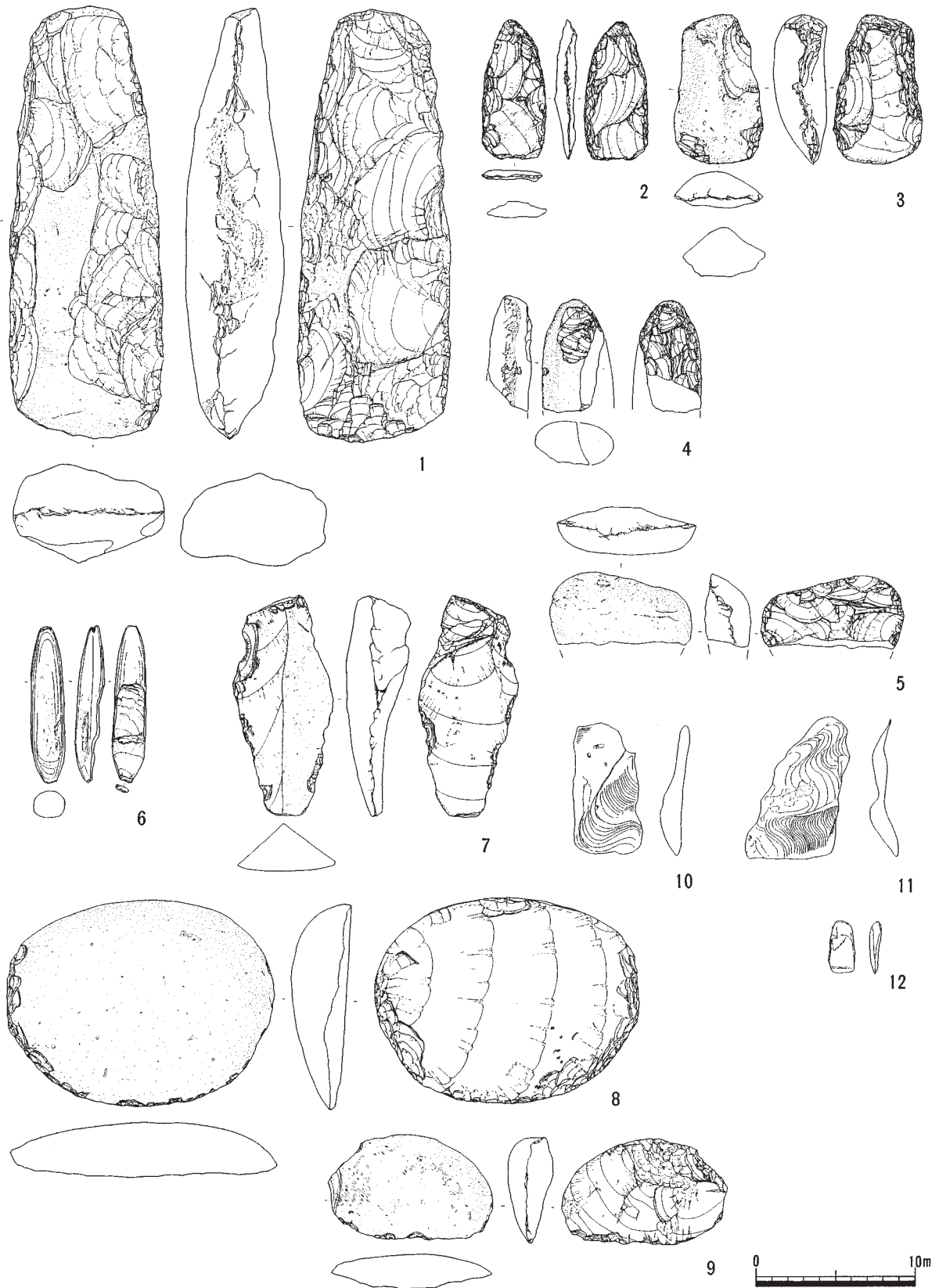
石器も多数表面に散布しており、大小の打製の石斧状製品が多数存在することに特徴があります。その中には断面が円筒状を呈するものが含まれており、磨製石斧の未製品とも考えられます。また大型の不定形剥片の一縁辺に刃をつけたスクレイパーが存在し、楕円形、棒状の自然礫を利用したスタンプ状や棒状石器と磨石、敲石類も多量に存在していました。これら石器の原材は、周辺の高麗に多量に露出した玄武岩の転礫を使用し、この場所で製作されたものと考えられます。

骨角製品や貝製品の発見は少ないものでしたが、小型のシャコガイの腹縁部を短冊状に割りとった貝斧状製品が3点(10、11、12)確認されました。その中の一点(12)は刃部に研磨された痕がかすかに認められました。こうしたシャコガイ腹縁部を利用した貝斧の型式は、ミクロネシア地域に特徴的に分布しています。

### 石野遺跡の土器



石野遺跡の石器



1～5 打製石斧、6 クサビ状石器、7～9 スクレイパー、10～12 シャコガイ製貝製品、

### 石野遺跡の遺物産状



### 石野遺跡の位置付け

西太平洋上の孤島に発見された石野遺跡は、オセアニア考古学のなかで、どのような位置づけが出来るのでしょうか。

#### 土器

全て無文土器であり、文様から系統を探ることは出来ませんでした。但し胎土分析の結果は、マリアナ地域との関係を示唆するものでした。

#### 石器

石器の様相は複雑です。そもそもこの調査の端著をなした大正期発見の磨製丸ノミ形石斧の類似品は、残念ながら確認されませんでした。その代わり多数の打製石器類、磨石、敲石、石皿などが発見されました。

打製石器の中には円筒形を呈した未製品と考えられるものが含まれており、磨製の丸ノミ形石斧と関連する資料の可能性があります。

マリアナ地域には打製石器を主体にした先史文化は確認されていません。打製石器群は、伊豆諸島や本州、さらに遠くフィリピン、台湾などに知られており、この方面との関連を調べる必要があるでしょう。

#### 貝製品

シャコガイ製貝斧類（未製品含む）が発見されています。腹縁部利用型であり、マリアナやミクロネシアとの関連が示唆されます。

#### 遺構

遺構には祭壇、積石遺構、線刻画が描かれた巨石などがあります。広大なオセアニア地域には、石を組んだ祭壇遺構などが多数分布してお



り、巨石を利用する施設という点では共通しています。しかし石野遺跡の例を細かく検討すると、自然の丸石を組み中央に立石を配した遺構は、縄文文化をはじめ本土の先史～歴史時代にかけて認められる遺構型式と似ています。

特にシャコガイやサンゴ石を配した積石遺構は、北側の伊豆諸島や西側の琉球列島に分布する先史時代の積石墓、覆石墓と呼ばれる墓地遺構に酷似しています。

また巨石に描かれた線刻画は、オセアニア地域の伝統とも考えられ、鋭い利器によるドット線で描くベッキング技法と呼ばれる彫刻手法は、ポリネシアのハワイ諸島の岩絵などに特徴的に認められるものです。

このように石野遺跡の石器文化は、北硫黄島という地理的位置からして、より南のマリアナ地域との関連で考えるのが順当ですが、その文化様相のなかにはオセアニア地域、さらに西太平洋を挟んだフィリピン諸島、琉球列島、そして北側の伊豆諸島にも及ぶ広汎な文化要素が含まれており、今後の大きな研究課題になっていると言えます。

石野遺跡を残した人々は、謎の大洋航海民文化の担い手であったと言わざるをえないのが現状です。

マリアナ地域の貝斧



## 10. マリアナと「太平洋の道」

### 丸ノミ形石斧と円筒石斧

北硫黄島と父島発見の磨製丸ノミ形石斧は、日本列島内部に展開した縄文・弥生文化には認められない石斧型式でした。類例は小笠原の南に連なるマリアナ諸島に存在していました。特に南部マリアナのグアム、ティニアン、サイパン島には「円筒石斧」と呼ばれる石斧の身が円筒で、刃部が片刃の磨製石斧が多数発見されています。

こうした視点から、小笠原発見の磨製丸ノミ形石斧は同じ円筒石斧の仲間であり、その中心的な地域が南部マリアナに存在することは確かと考えられます。

マリアナ地域の円筒石斧



### マリアナ諸島の先史遺跡

マリアナ諸島は東経 144 度 30 分 ~ 146 度、北緯 13 度 ~ 21 度にあり、南北に弧状を描いていて 20 の島々と岩礁より成ります。また本諸島を、北部マリアナ小島群 - ウラカス、マウグ、アッソンソン、アグリガン、パガン、アラマガン、ググァン、サリグァン、アナタハン - と南部マリアナ小島群 - サイパン、ティニアン、アギーガン、ロタ、グアム - に区分することもあります。

北部の島々は壮年期の火山島で山頂が海から険しくそそり立ち、人間の上陸を阻んでいるようです。現在はすべて無人島です。

マリアナ地域の石斧



南部の島々は、サンゴ礁の島で海岸線は白砂とリーフに囲まれ、ラグーンの発達が著しく、多くの住民が各島に生活しています。

現在、グアムはアメリカ自治属領(準州)の島で、他の島々は北マリアナ諸島連邦に所属しています。

マリアナ諸島は、ミクロネシア地域で最も早く先史人が移住した島々です。言語学的にはチャモロ語が話され、アウストロネシア語系インドネシア語派に分類されています。最古の住民はメラネシア地域、またはフィリピン島嶼部から、土器、タロ・ヤム芋等の園芸農業、イヌ、ブタ、ニワトリ等の家畜をもって移住してきたモンゴロイド集団とされています。

## マリアナ先史文化の区分

マリアナの先史文化は、紀元前1600～紀元後800年頃の「先ラッテ期」と紀元後800～1600年の「ラッテ期」とに編年されています。

先ラッテ期の遺跡は、南部マリアナ地域に発見されています。リーフをもつ砂浜沿いの1～3mの深さに包含され、必ずラッテ期の文化層の下に発見されます。またオセアニアの多くの初期遺跡が、こうした砂浜に立地していることから、海上交通による人の移動や海洋資源による食糧依存が中心の生活であったことが窺えます。

ラッテ期の遺跡は南マリアナだけでなく、北部マリアナにも確認されています。この時期の特徴は、「ラッテ・ストーン」と呼ばれるサンゴ石灰岩を使用して、シャフト(立石)とキャップストーン(半球状載石)が

ラッテストーン



組み合わされ、2本で一对となり3～7対で一遺構をなす石造物の存在です。

このラッテ遺構は家の土台説が一般的ですが、巨大な例もあり、祭祀、墓域等の特殊な遺構とする説も捨てがたいものです。遺物はラッテ遺構の周辺から発見されることが多く、マリアナ無文土器、シャコガイ製貝斧、円筒石斧、石弾、石臼、埋葬人骨などがあります。

## 円筒石斧文化

マリアナにおける円筒石斧は、新しいラッテ期を中心に発見されています。現在まで小笠原と八丈島で発見された円筒石斧類は、発掘品ではなく、年代的位置づけができない二次資料です。しかし、年代比較資料として、サイパンのアチュガオ遺跡の3000年前、北硫黄島石野遺跡の2000年前、八丈島倉輪遺跡の5000年前頃の年代があります。

この年代値と円筒石斧の関係は石器時代ということから、そうかけ離れた時期ではない2000～3000年前頃と位置づけることも可能です。

ではマリアナ先史文化の円筒石斧と、小笠原や八丈島に発見される磨製石斧との文化的関係はどうでしょうか。石器の特徴、製作手法などから、小笠原父島の西町例、八丈島の孫兵衛遺跡例は石質、形態、技術を含めて酷似しています。一方、北硫黄島例は、丸ノミ状の刃部や石質の緻密性で少し異質な資料です。

また八丈島に発見される供養橋遺跡例を代表とする大型磨製石斧類は、マリアナ地域より南九州や琉球列島、さらにフィリピン諸島との関係を探る必要があります。

もう一つの日本文化

マリアナ先史文化において、円筒石斧の成立を示唆する資料や関連遺跡は確認されておらず、オセアニア考古学の重要課題の一つでもあります。今日、この地域の成果からして、マリアナ起源の円筒石斧が、小笠原を經由して八丈島にまで北上した可能性は大きいのです。従って円筒石斧文化とも呼べる南方からの北上ルート、「太平洋の道」として位置づけることもできます。

しかし、このカヌー製作工具をもった先史人集団は、黒潮本流を越えて北上した形跡は認められていません。言い換えれば、列島内部に展開していた日本文化（縄文・弥生文化）の外側に形成された、「もう一つの日本文化」と意義づけることもできます。

太平洋の道



## 11 . 小笠原の考古資料群

小笠原地域の考古資料は、殆どが年代の特定が難しい採集遺物です。(石野遺跡はやや例外です)。従って、それらの年代は遺物の型式から推測し、周辺地域と比較するしかないのですが、現状では資料不足です。ここでは暫定的に小笠原の考古資料を「群 - 系」としてまとめてみます。

### 1 群 - 石野遺跡系

土器は厚手(鉢)と薄手(皿)の2器種構成の無文土器です。胎土分析ではマリアナ系が示唆されています。石器は打製石器や磨石、石杵などが主体であり、日本本土的なものですが、貝斧はオセアニアに広く見られる系統のもので、放射性炭素年代測定では約2000年前の値が得られていますが、年代の究明は今後の研究に待つところが大です。

### 2 群 - 大根山遺跡系

大根山の表採資料。打製石器群であり、1群に近い資料です。大型石器(砂岩やサンゴ)と小型石器(メノウ)の二組成は、マリアナ、台湾、琉球などで見られる石器組成との類似を感じさせるところです。

### 3 群 - 丸ノミ形石斧系

父島と北硫黄島で採集された片刃磨製石斧を中心とする一群です。このゴージュの系統はマリアナのラッテ期(紀元後800年以降)に見られるもので、小笠原地域との間に何らかの関連がある事を示しています。なお八丈島にも類似の片刃磨製石斧(年代不明)が存在しており、関連が注目されます。

### 4 群 - 沖村遺跡系

沖村遺跡発見の骨角貝製品ですが、擬餌針はウシなどの陸獣の角を加工したものであり、穿孔には鉄製の利器が使われらしく、鉄サビ痕が認められる事から、近世以降の入植者が残した遺物の可能性があります。

### 5 群 - 評議平系

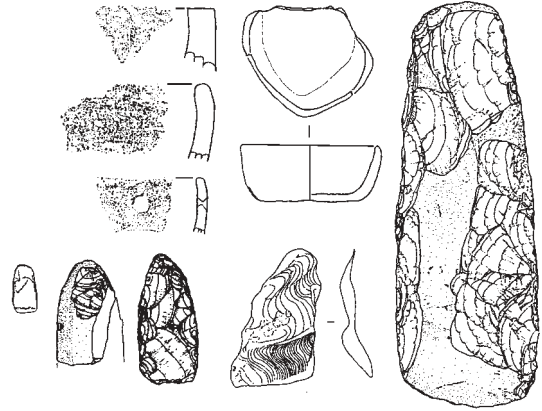
沖村に隣接した丘陵地帯で表採された素焼き(焼締系)の陶器片です。大型の鉢や甕類で、常滑や壺屋の無釉焼締陶器とは異なるものです。おそらく近世以降の入植者に結び付けて考えられるでしょう。

### 6 群 - 近代陶磁器系

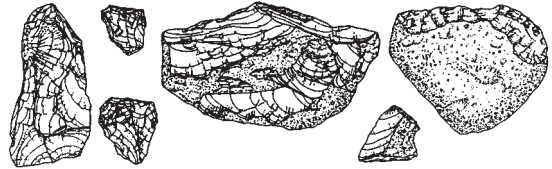
小笠原の開拓地には、沖縄県那覇で焼かれた壺屋焼の大型甕が多数残されています。また図示したように明治の印判手、瀬戸美濃の陶磁器類、イギリス製陶磁器など、各種の近代陶磁器が発見されています。

古代

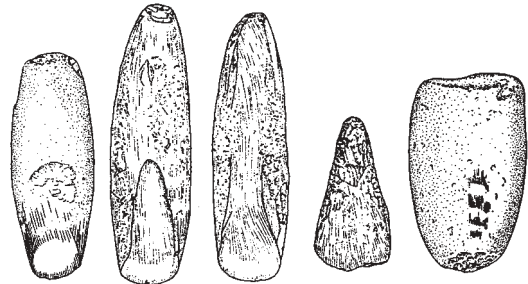
1 群 - 石野遺跡系



2 群 - 大根山遺跡系



3 群 - 丸ノミ形石斧系

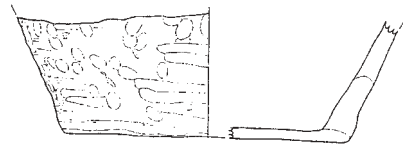


近世近代

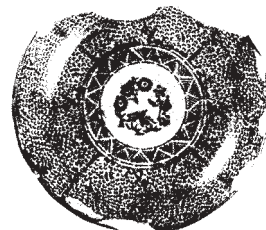
4 群 - 沖村遺跡系



5 群 - 評議平系



6 群 - 近代陶磁器系



参考文献

- Hawks, Francis L. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China seas and Japan, performed in the years 1852, 1853, 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy*, 1856
- 甲野 勇 1942 「北硫黄島発見の圓鑿型石斧」 『人類学雑誌』 57-7, pp.273-277, 日本人類学会
- 宮崎 博・永峯光一・小田静夫編 1973 「東京都島嶼部における遺跡調査」 『文化財の保護』 5, pp.66-146, 東京都教育委員会
- 永峯光一・宮崎 博・小田静夫編 1973 「小笠原諸島の遺跡分布調査」 『考古学ジャーナル』 77, pp.12-15, ニュー・サイエンス社(東京)
- 東京都編 1979 『小笠原諸島自然景観調査報告書』 175p., 東京都建設局公園緑地課
- 文部省・文化庁編 1980 『小笠原の自然 - 小笠原諸島の学術・天然記念物報告書』 234p., 文部省大学学術局・文化庁文化財保護部
- 東京都教育庁社会教育部文化課編 1981 「特集 小笠原諸島文化財報告」 『文化財の保護』 14, pp.1-154, 東京都教育委員会
- 小日置晴展・杉本正文・菅原 道 1984 「小笠原諸島、父島、母島の考古学的調査」 『考古学ジャーナル』 227, pp.27-29, ニュー・サイエンス社(東京)
- 鈴木高弘 1989 「小笠原史における父島の史跡・戦跡 - 父島「歴史の道」への基礎的作業 - 」 『研究紀要』 3, pp.3-28, 東京都小笠原高等学校
- 永峯光一・小日置晴展・園村維敏編 1990 『小笠原諸島他遺跡分布調査 - 平成元年度調査概報』 32p., 小笠原諸島他遺跡分布調査会
- 永峯光一・品田圭二・堀苑孝志編 1991 『小笠原諸島他遺跡分布調査 - 平成二年度調査概報』 36p., 小笠原諸島他遺跡分布調査会
- 永峯光一・小田静夫・早川 泉編 1992 『小笠原諸島他遺跡分布調査報告書』 126p., 東京都教育委員会
- 田中弘之 1997 『幕末の小笠原 - 欧米の捕鯨船で栄えた緑の島 - 』 中公新書1388, 273p., 中央公論社(東京)
- 小田静夫 1998 「考古学からみた小笠原の歴史」 『学芸研究紀要』 14, pp.1-81, 東京都教育委員会
- ダニエル・ロング編 2002 『小笠原学ことはじめ』 小笠原シリーズI, 南方新社(鹿児島)

発掘された小笠原の歴史

Ogasawara Archaeology and History

編集 小田静夫・水山昭宏  
 発行 小笠原村教育委員会  
 〒100-2101 東京都小笠原村父島字西町  
 発行日 平成 14 年 3 月 31 日

Authors and Editors: ODA Shizuo, MIZUYAMA Akihiro  
 Publisher: Ogasawara Municipal Board of Education  
 100-2101 Nishimachi, Ogasawara, Tokyo  
 March 31, 2002

印刷 電算印刷株式会社